

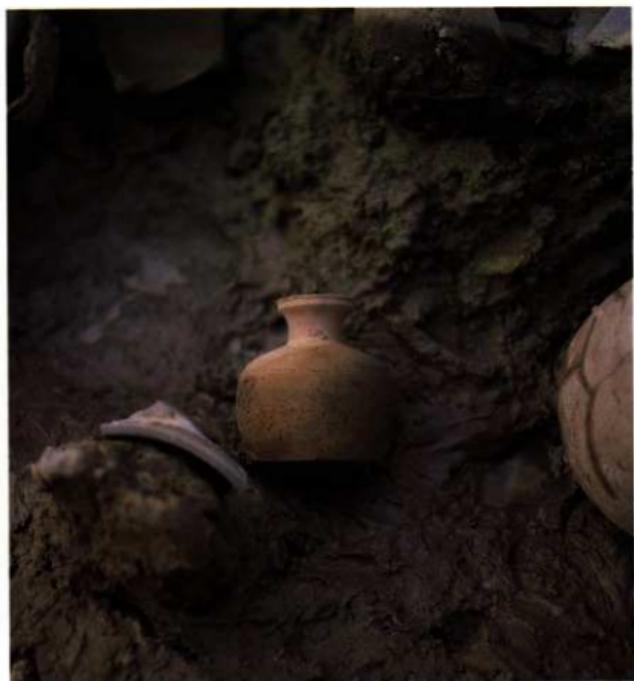
佐土原町文化財調査報告書第7集

した むら  
**下村窯跡概要報告書 I**

—1992.3—

宮崎県宮崎郡佐土原町教育委員会

# 下村窯跡概要報告書 I



下村窯跡出土写真（壺完形品）

1992. 3 宮崎県佐土原町

佐土原町教育委員会

## 序

佐土原町は日向灘を臨む宮崎平野のほぼ中央に位置し、黒潮が運ぶ暖かい風と降り注ぐ陽光に包まれ、多湿ではありますが温暖な気候風土に恵まれており、古代から先人が躍動した遺跡が点在しています。特に伊東氏の時代は京文化を思わせる、華やかな文化咲きほこる都であったものと思われ、数多くの文化財が残されています。

当町は昭和59年の「宮崎SUNテクノポリス開発計画区域」、昭和63年には「宮崎・日南リゾート地域」に指定されたこともあり、近年、特にリゾート関係の開発が進みこれに関し埋蔵文化財の発掘調査も増加しており、佐土原町の歴史も少しづつではありますが解明されてきています。

今回、ゴルフ場建設計画に先立ち調査致しました下村窯跡群遺跡は平成2年度に実施した遺跡詳細分布調査によりその所在が分かったものです。本年度の調査結果は、灰原部から多量の須恵器片を検出することができました。又、その中には布目瓦などもあり国分寺等との関連もあるようで、今後の調査結果が期待されます。

埋蔵文化財の重要性をご理解いただき、快く調査に応じていただいた  
株式会社はじめご協力いただいた下村地区の皆様に感謝の意を表しますとともに、  
本書が宮崎県の古窯研究の一助になれば幸いと思います。

この調査に当たり、調査手順から始終ご指導いただいた県教育委員会はじめ調査員、町民の皆様のご理解とご協力に対し厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

佐土原町教育委員会

教育長 小野 勝

## 例　　言

1. 本書は、[ ] 株式会社によるゴルフ場建設に伴い、事前発掘を実施した下村窯跡発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は佐土原町教育委員会が主体となり、社会教育課主事 木村明史が担当した。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体	佐土原町教育委員会	教　育　長	小　野　勝
		社会教育課長	寺　坂　正　祐
		同課長補佐	斎　藤　成　實
		庶　務　主　幹	関　谷　文　子
		"　臨時職員	日　野　良　子
		調査担当　主　事	木　村　明　史
特別調査員	福岡大学人文学部教授	小　田　富　士　雄	
	奈良教育大学教育学部教授	三　辻　利　一	
	奈良国立文化財研究所室長	西　村　康	
調査指導	宮崎県文化課主査	北　郷　泰　道	
	"	長　津　宗　重	
調査補助員	尾形　農一・宮城　伸一・島袋　紀子・松林　豊樹（琉球大学）		
	秦　憲次・高橋　誠・原田　範昭（熊本大学）		
	金丸　武司・久木田浩子（別府大学）		
	有馬　義人・伊東　浩・米久田真二・和田　理啓（宮崎大学）		
	鳥枝　誠（近畿大学）・寺坂　博志（琉球大学）		
作業員	[ ]		
	[ ]		
	[ ]		
	[ ]		
	[ ]		
	[ ]		
整理員	[ ]		

4. 本報告書の方針は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。
5. 土器の色調は、農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。
6. 出土遺物は、佐土原町教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆は、斎藤・木村が分担し、編集は長津・木村で行った。

## 本文目次

序

例言

第Ⅰ章 はじめに .....	(森藤) .....	9
調査の経緯 .....	9	
第Ⅱ章 発掘調査の概要 .....	(木村) .....	19
1. 遺跡の立地と環境 .....	19	
2. 調査の概要 .....	22	
(1) B地区 .....	22	
1) 須恵器		
2) 瓦		
(2) C地区 .....	34	
1) 須恵器		
2) 瓦		
第Ⅲ章まとめ .....	(木村) .....	48

## 挿図目次

第1図 下村窯跡調査地周辺の地形－布団瓦等出土分布図 .....	20
第2図 調査により確認できた窯跡及び灰原 .....	21
第3図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(I) .....	24
第4図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(II) .....	25
第5図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(III) .....	26
第6図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(IV) .....	27
第7図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(V) .....	28
第8図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(VI) .....	29
第9図 B地区木片出土実測図 .....	33
第10図 仮12号窯灰原部出土状況図 .....	35～36

第 11 図	下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(Ⅰ)	37
第 12 図	下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(Ⅱ)	38
第 13 図	下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(Ⅲ)	39
第 14 図	下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(Ⅳ)	40
第 15 図	下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(Ⅴ)	41
第 16 図	下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(Ⅵ)	42
第 17 図	下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(Ⅶ)	43
第 18 図	下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(Ⅷ)	44

## 表 目 次

表 1-(1)	下村窯跡 B 地区遺物観察表	30
表 1-(2)	下村窯跡 B 地区遺物観察表	31
表 1-(3)	下村窯跡 B 地区遺物観察表	32
表 2-(1)	下村窯跡仮12号窯遺物観察表	45
表 2-(2)	下村窯跡仮12号窯遺物観察表	46
表 2-(3)	下村窯跡仮12号窯遺物観察表	47

## 図版目次

図 版 1	下村窯跡群全景写真	1
図 版 2	B 地区・C 地区全景	2
図 版 3	B 地区建物遺構	3
図 版 4	C 地区仮12号窯・仮24号窯	4
図 版 5	B 地区出土遺物	5
図 版 6	B 地区出土遺物	6
図 版 7	C 地区仮12号窯出土遺物	7
図 版 8	C 地区仮12号窯出土遺物	8

図版 1

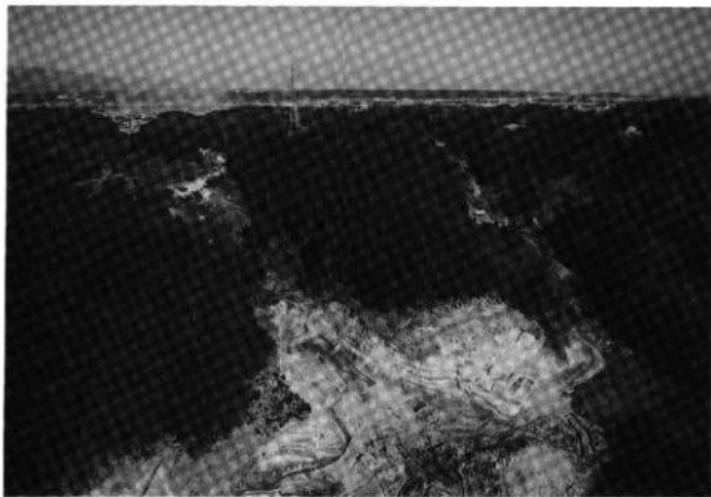


下村蒸跡群全景写真

圖版 2



B 地区全景



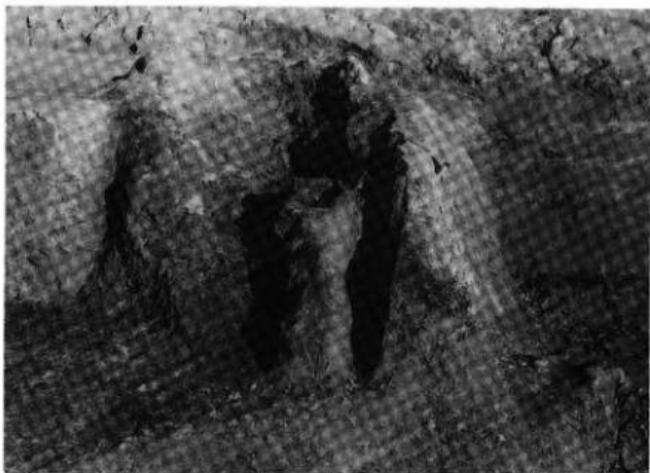
C 地区全景

図版 3



B 地区建物造構

図版 4

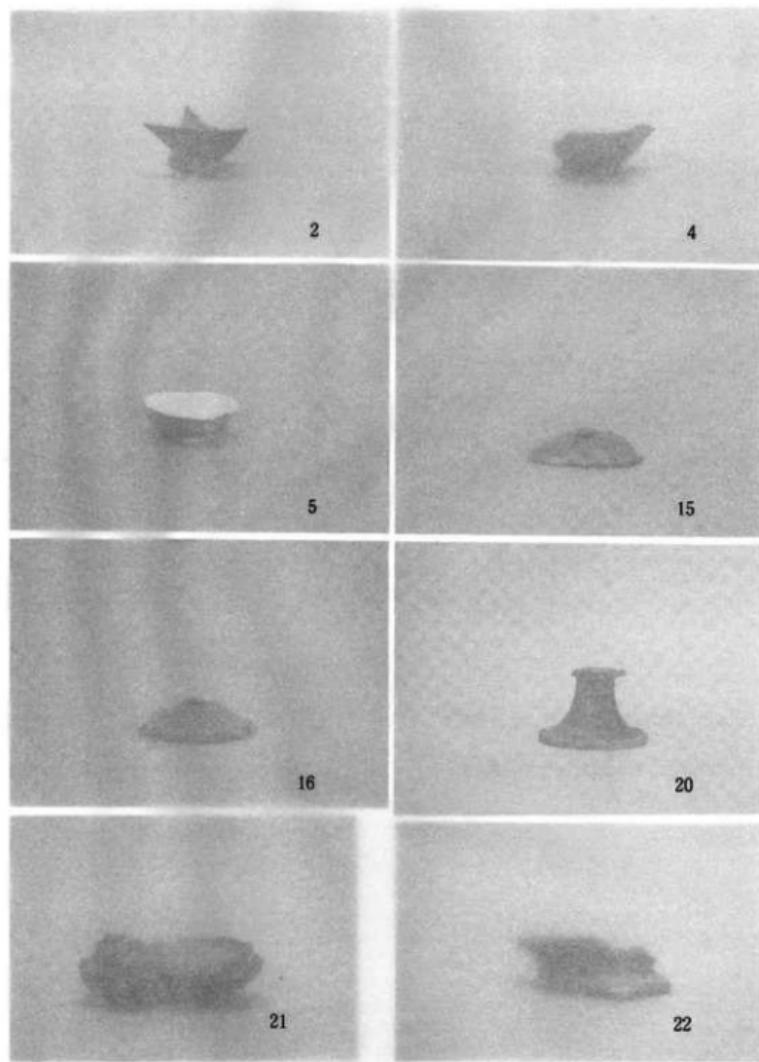


C地区仮12号窯



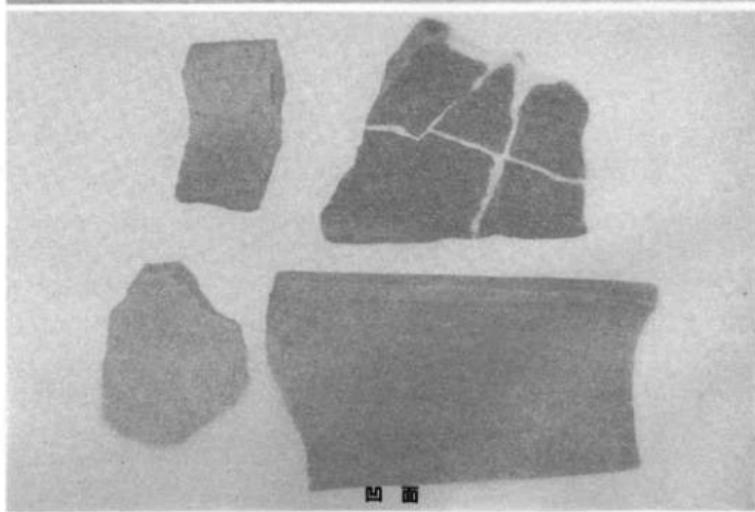
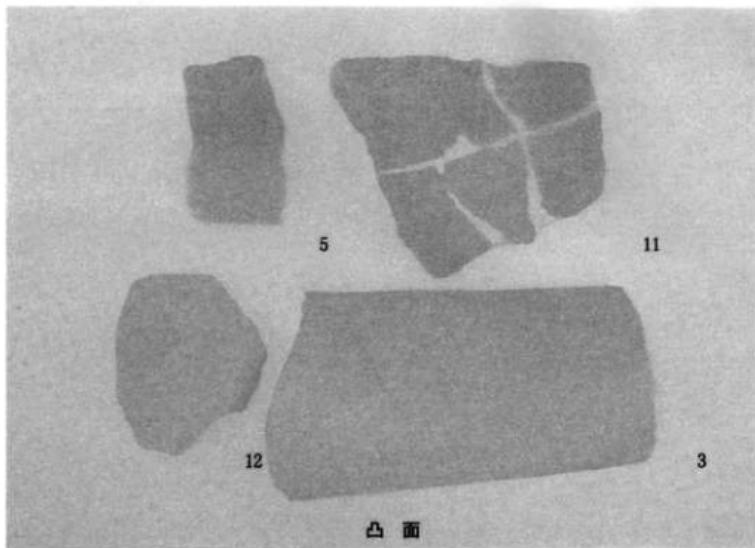
C地区仮24号窯

图版 5



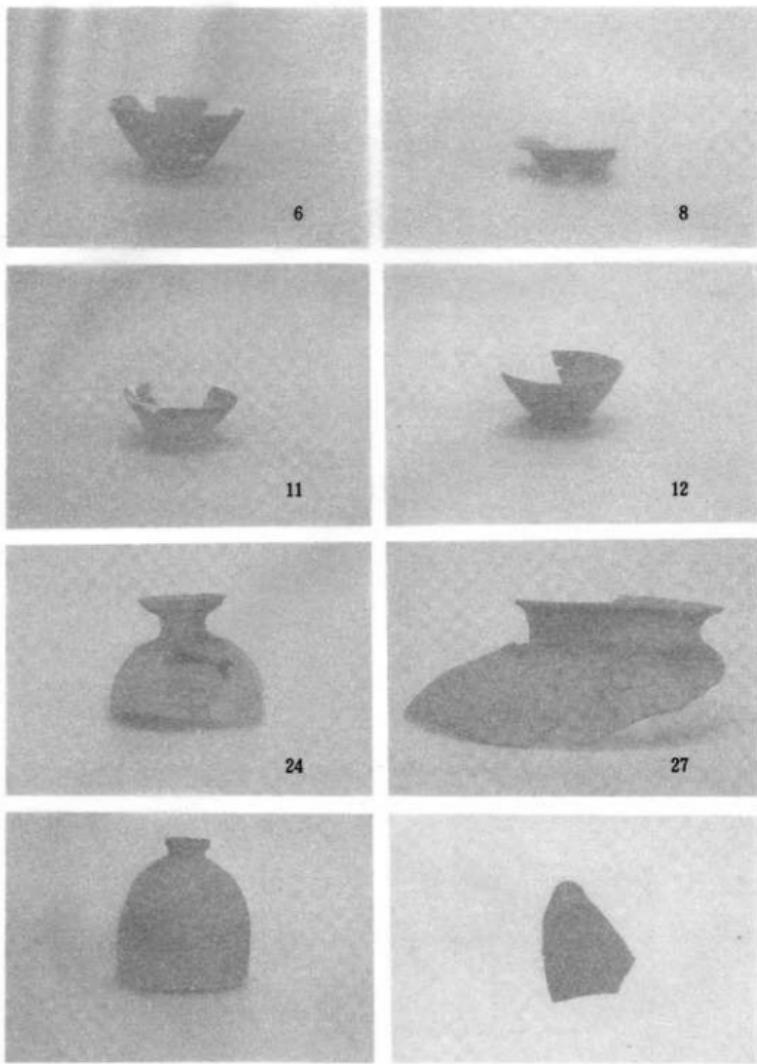
出土遗物

図版 6

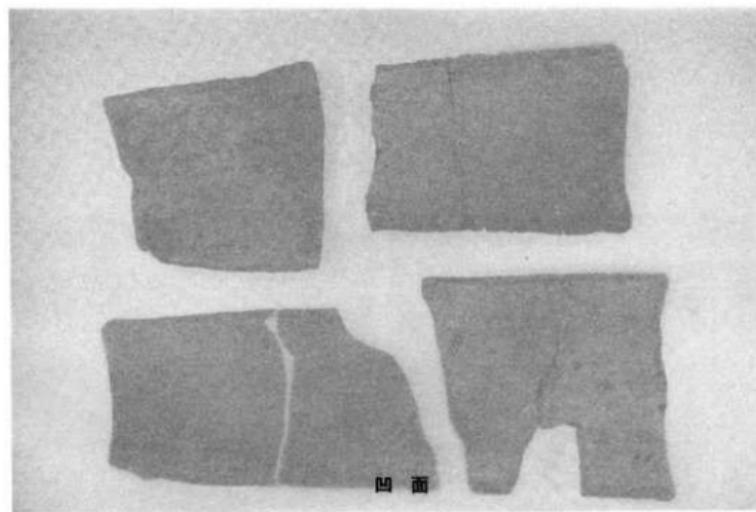
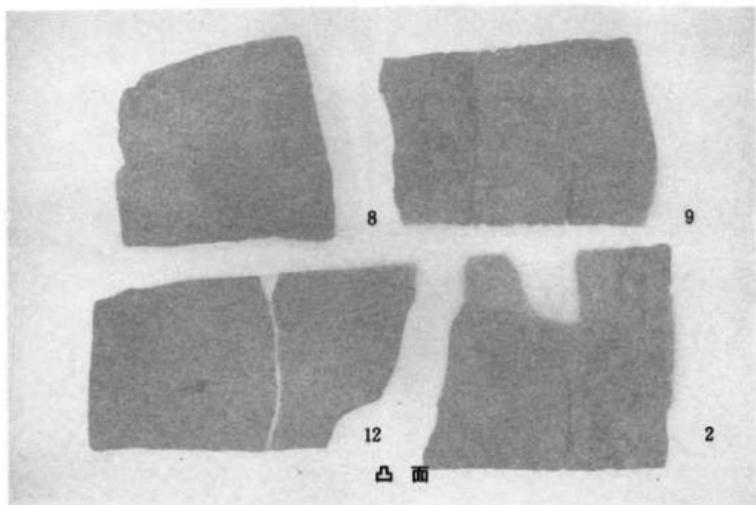


B地区出土遺物

図版 7



C地区仮12号窯出土遺物



C地区假12号窯出土遺物

## 第Ⅰ章 はじめに

### 調査の経緯

佐土原町大字東上那珂下村地区は、地区東側山裾に昔からの農村地区と新しく開発された西側台地に、集合住宅や分譲住宅の立地する245世帯、人口826人の新旧者混住の集落である。この地区では毎月の第1、第3日曜日に「ふれあい朝市」を開き、新鮮な農産物を新居住者に供給したり、西側居住区内の草刈り奉仕などを農家の方々が行ったりして地区内のコミュニケーションを図っており、新旧者混住する地域としては稀に見る融和のとれたモデル地区である。

この地区の東側山裾部は、昔から須恵器や瓦の破片が採取されていたところで、周知の埋蔵文化財発掘地として知られていたところである。

この地にハ [ ] 株式会社によるゴルフ場建設設計画が策定され、同社から平成元年4月3日事業策定に当たっての「文化財の有無について」照会があり、自得寺遺跡他5ヶ所の遺跡があることを回答した。

佐土原町と同社による基本協定書が交わされたのは平成元年6月12日のことである。この中で、文化財の保護については第13条（文化財の保護）[ ] のとおり協定されている。

また、同年9月4日付けで同社と佐土原町教育委員会の間に埋蔵文化財の取り扱いについて覚書を[ ] のとおり取り交わした。

このような中で、平成2年度に実施した「補助事業遺跡詳細分布調査」で窯跡群の存在が確定され、平成2年10月9日付け、同社に窯跡の存在と試掘調査の承諾依頼をした。この事前調査は町の予算により、1ヶ月の期間で緻密な表面調査と3ヶ所のトレンチを入れた。この結果、須恵器や瓦の破片が出土し古窯跡群の存在が確認された。

当町においては、窯跡の調査および原因者負担による手続きなど初めてのことでもあり、県文化課の岩永係長はじめ北郷主査、長津主査、面高主査のご指導を仰ぎながら、また、調査方法では同年12月10日に福岡大学小田富士雄教授に来道いただき専門的な調査指導を受けた。

同氏によれば「南九州に16基以上にも及ぶ窯跡群が発見されたことは極めて珍しく、かつ重要である。布目瓦もあり瓦陶兼業も考えられる。調査もさることながら何とか地形を保存してもらいたい。」とのコメントを受けた。文化財の保護については、先人達の残した全ての埋蔵文化財を私達の祖先が守り残してきたように現状を維持するのが最良であるが、不明瞭な歴史の紐解きに資することができ得るなら、後代の研究資料に貢献できるなら、最低限の記録保存

もやむを得ないものであるとの考えに立ち、開発行為との調整を図るとして、明けて平成3年2月2日 [ ] 株式会社宮崎開発事務所において長津主査（県文化課）斎藤輔佐・木村主事（町教育委員会）と [ ] 取締役・[ ] 係長（[ ] 株式会社）とで、ゴルフ場建設計画とそこに眠る埋蔵文化財の保存と記録保存について協議をおこなった。

協議内容は ①埋蔵文化財の重要性の認識 ②記録調査の原因者負担 ③調査期間 ④お互いの記録調査への協力などを話し合った。幸いであったことは、近年のゴルフ場建設は面積の30%を残地森林として環境保護上残さねばならないということで、山肌に眠っている窓跡は相当現状保存ができることもあったが、なにより一番には、[ ] 株式会社の方々が文化財に対する思いやりをもたれており、重要性を十分に認識されていることであった。文中を借りて記して敬意を表したい。その翌々日2月4日には本社の了解も得られたとのことで、その迅速処理にも感謝申し上げたい。

協定書の締結までにはまだ日数を要したが、早速2月20日には樹木の伐採について打ち合わせをおこなった。樹木の伐採は調査区域をA B C Dに分割し3月14日から開始された。

この間、[ ] と数回の打ち合わせ、県文化課の指導を仰ぎながら発掘調査の方法について協議をした。この結果、窓跡は高熱を帯びているので上空50メートルの位置に電力高圧線が南北に走っているが磁気探査法の可能性もありとして、奈良国立文化財研究所の西村康先生に依頼することになり、早速3月28日には調査が行われた。調査結果は磁気探査法が可能であるとの報告を受けた。

磁気探査は応用地質株式会社が担当することになり、[ ] 株式会社と応用地質株式会社の間で4月15日に契約された。4月18日[ ] により、磁気探査のための杭打ち作業が開始され4月19日から磁気探査が始まられた。また、同日には佐土原町教育委員会において「埋蔵文化財に関する協定書」[ ] が交わされた。

応用地質株式会社の磁気探査結果は6月13日に報告された。この結果報告は、本報告書に詳細を委ねここでは割愛する。

予算については、年度調査費総額を受託し町一般会計予算に繰り入れ、支山をおこなう方法をとった。5月13日から[ ] と本年度の調査費の予算協議に入り了解を得られたので、平成3年度佐土原町一般会計6月補正予算[ ] に提出した。申しおくれたが、これまでの伐採費から磁気探査の費用などすべて[ ] 株式会社から直接支払われたものであることを付け加える。

6月18日に発掘調査承諾書を依頼し、これも迅速に処理され文化庁への発掘調査通知も滞り

なく終了した。6月26日には佐土原町役場において平成3年度の「下村窯跡埋蔵文化財発掘調査委託契約書」が締結された。

7月2日には発掘調査の基本的な考え方について、佐土原町役場会議室において教育長、県文化課、(株)、(株)、応用地質(株)の関係者全員出席のもと、協議をおこなった。

協議内容は ①造成する部分の窯跡はすべて調査対象とする。 ②調整池内部の窯跡は磁気探査結果から遺構がないと判断されたため調査しない。 ③造成しない部分の窯跡はトレントで確認し重要なら調査対象とする。調査しない場合は看板等設置して保存する。 ④灰原・工房跡なども以上に準じる。 ⑤重機械・オペレーター・ベルトコンベアーは、株式会社が提供する。ただし、全体の安全管理は町教育委員会が全責任を持つ。以上のとおり、窯跡の発掘調査の基本方針をまとめた。

7月から、いよいよ本発掘調査を開始したのであるが事前に、安全管理の面からと窯跡調査の勉強会ということもあり、7月9日に調査に携わる者すべてが佐土原町中央公民館視聴覚室に集まり、発掘調査説明会を開催した。講師には土木面の安全管理について所長(株式会社九州支店)にお願いし、長津主査からは『窯のはなし』と題した講話を受けた。両氏に感謝申し上げる次第である。

発掘調査はC地区から始められた。粘土層のため少しの雨でもぬかる中、また8月猛暑の中、大変な重労働で調査員の皆様には大変なご苦労をかけたと思われる。なかでもシルバーパートナーズセンターの皆様にはご無理を願って調査作業に携わっていただきありがとうございました。

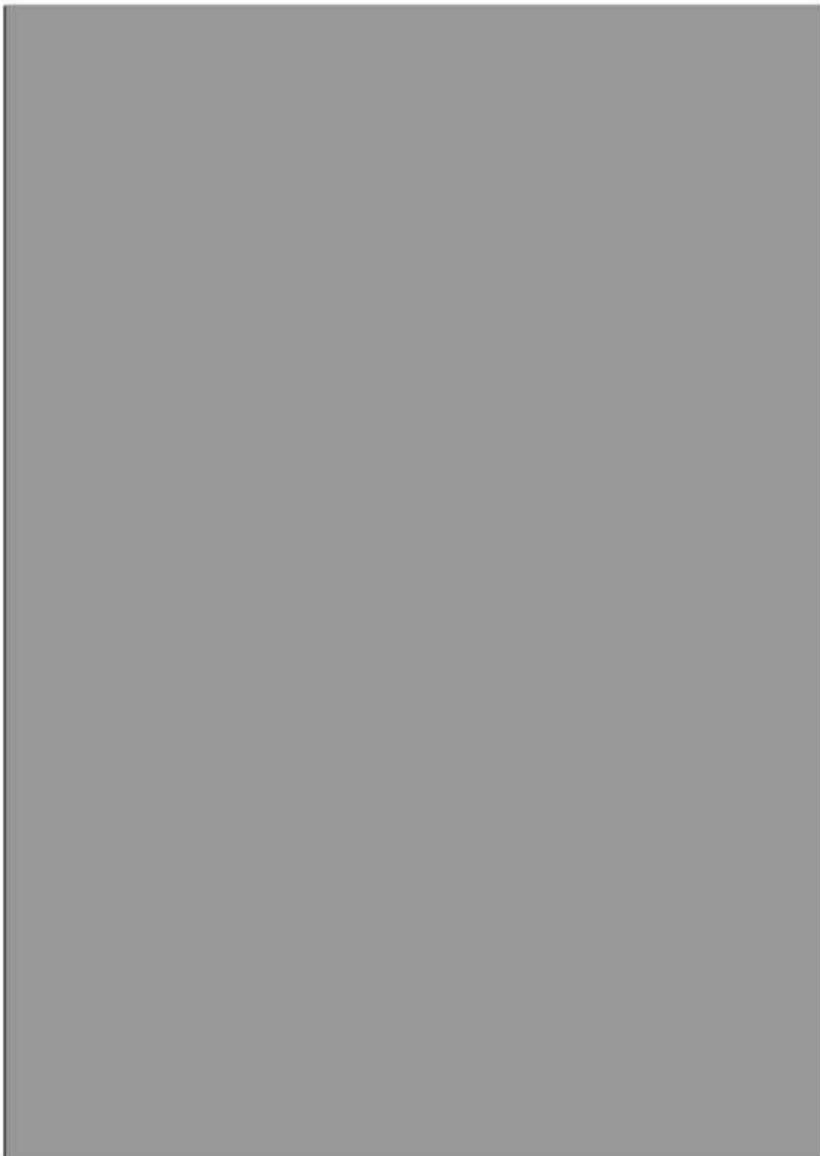
台風接近で荒れ模様の8月22日、福岡から揺れる飛行機で再度、米道くだされ、雨降る現場で熱心に調査方法についてご指導下された小田富士雄教授にはその熱意に大変感謝申し上げる次第である。

残暑の烈しい9月初旬、12号窯跡からおびただしい須恵器の破片が出土した。夏休み期間中、調査補助員として手伝ってくれた琉球大学、熊本大学、別府大学、宮崎大学、の皆さん、近畿大学の鳥枝君、人手が足りないからと無理をお願いした琉球大の寺坂君達にも見せたかった遺物の出土状況であった。猛暑の中、調査補助とは言いながらも苛酷な労働をお願いし、頑張ってくれた皆さんに感謝したい。

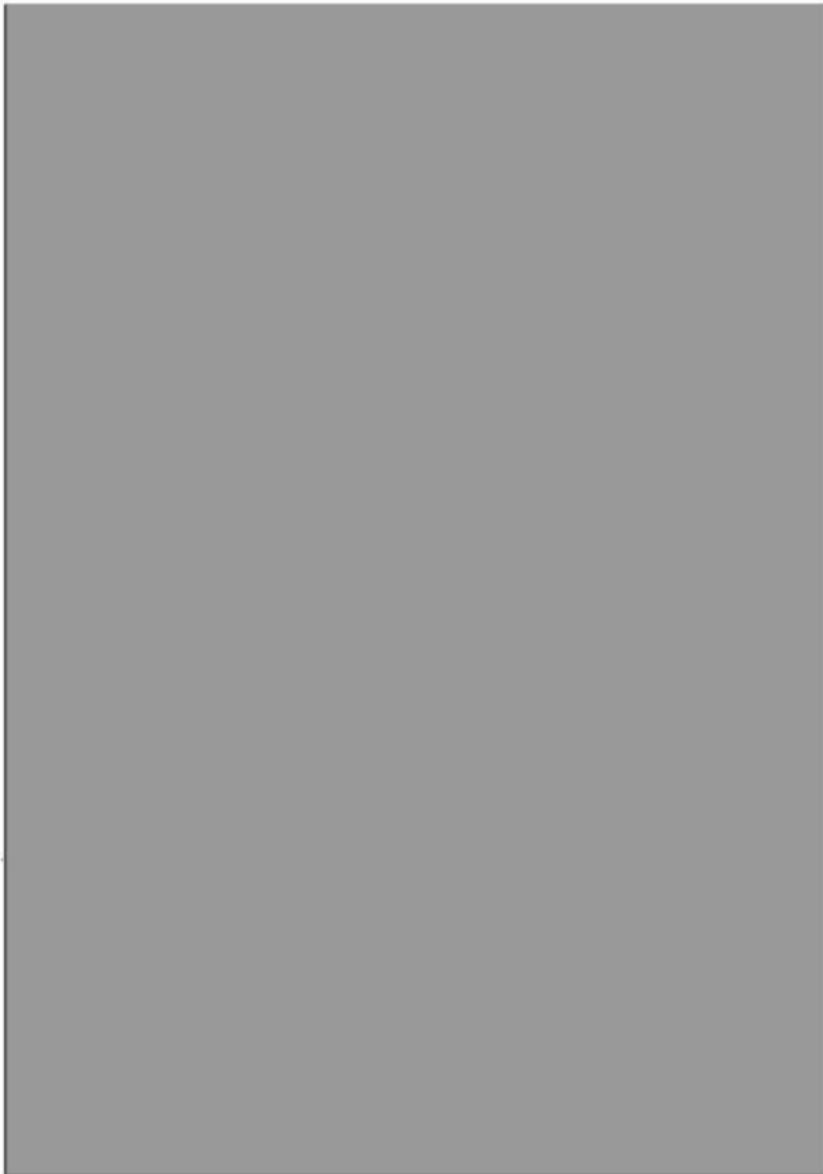
なお、発掘現地は足場が悪く、危険な状態のため、通常行う現地説明会を発掘現地でおこなうことができなかったため、平成4年1月26日開催した佐土原町生涯学習『歴史を語る』町民

大会会場で出土遺物の展示説明会を同時に開催した。町民約400名が完形をなしている須恵器の瓶や杯を感動して観察されていた。

最後になったが、下村窯跡発掘調査に深い理解を示していただき農道の利用や温かい励ましの言葉をかけてくださった下村地区の皆様に、心から感謝の意を表してこの項を括りたい。













## 第Ⅱ章 発掘調査の概要

### 1. 遺跡の立地と環境

下村窯跡は、佐土原町丘陵南端の一画を占め、東側丘陵裾部には下村川が流れている。周辺には多くの史跡が点在している。この地は東側前方に日向灘を望み、西側には九州山地が遠方に壁をなし温暖な地で、西南側に立地する仲間原台地・船野台地・年居台地は船野遺跡（船野型細石核と呼ばれる後期旧石器時代の編年示標）を代表として旧石器から縄文時代の遺跡が顕著に分布している。また佐土原町中央部に位置する佐土原丘陵には、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が主に見られる。その中にには装飾壁画出土で著名な土器田横穴墓群、あるいは弥生後期の下那珂貝塚など学術上重要な意味をもつ遺跡も調査されている。日向灘に接する沖積平野は、一つ瀬川と石崎川により形成され弥生時代後半までの遺跡で大半を占めている。

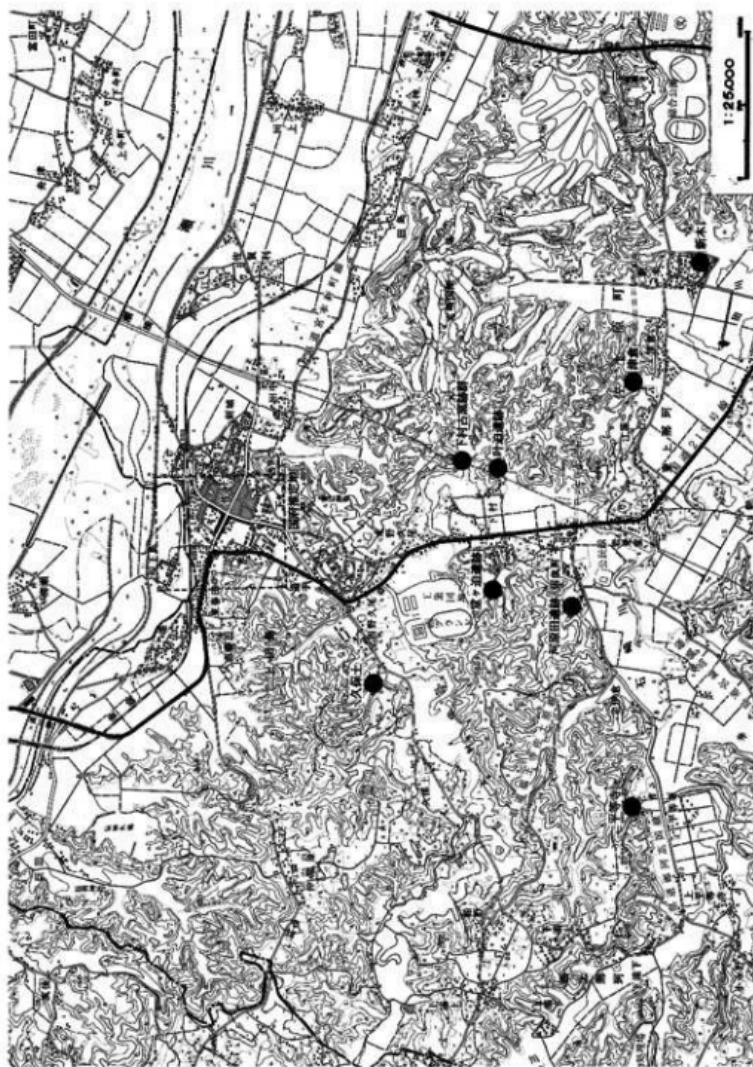
翻って、古代遺跡に門を転じると、上田島は『延喜式』の中で日向十六駅の一つにあげられているうちの「当麻駅」に想定され、那珂郡田島郷として記される。また日向国府の有力な候補地の一つにもなっている。国府に関する調査は、宮崎県文化課において昭和63年度から3ヶ年計画で実施され、国府推定の門安である布目瓦が數カ所で確認できた。それは尾根を一つ隔てた叶追遺跡、国道219号線を挟んだ西側の丘陵谷部の堂ヶ迫遺跡、同じく対面側にある丘陵先端の河原田遺跡である。いずれも下村窯跡の所在する丘陵の近くに位置する。採集遺物は、須恵器や凸面に横方向の繩目叩きを施した丸瓦で、下村窯跡出土遺物と同一であり窯跡群の広がりが伺える。

時代が下がって中世関係の史跡では、大光寺を中心とする寺院が、佐土原丘陵の北側の一支群の中に位置する佐土原城址を取り囲むようにして建っている。これは、当時の土豪が所領安堵のため中央の有力寺院と結びつかんとして建立した証であろう。

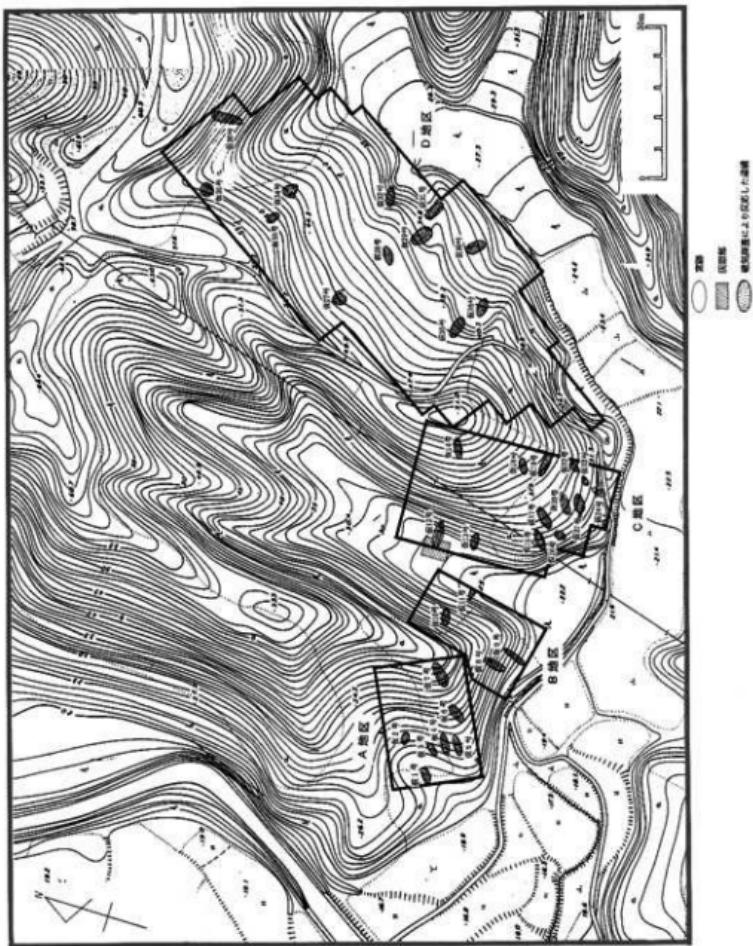
近世になると、江戸への陸路となる薩摩往還・飫肥往還・米良往還にとって佐土原は地理上交通の要となった。海上交通でも一つ瀬川の外港である福島があり、両ルートから各地の文化・産業が盛んに入ってきた。薩摩焼をモデルとした佐土原焼も17世紀代に愛宕山頂南側の茶屋村付近の苗代焼物稽古所設置に始まっている。また伏見系の佐土原人形は18世紀代から製作され、今板池周辺には窯跡がある。このように、窯跡が歴史の中でよく登場してくるのは、上田島を中心とした地域が佐土原藩という粘土を主成分にした地層で形成されていることにある。古代から工人達は、この地の粘土に門を付け採集して様々な歴史建造物や生活品の創造に関与してきたのであろう。

中世から近世にかけて佐土原特に上田島は、日向において地理的に優位な場所にあったため、重要な文化遺産が各所に顕在するのである。

第1図 下村窯跡調査地周辺の地形——布目瓦等出土分布図（1/5,000）



第2図 調査により確認できた墓跡及び灰原



## 2. 調査の概要

### (I) B 地区

A 地区は、調整池の堤防の築造場所から離れた残置森林として自然のまま残るので調査域から外した。B 地区の発掘調査は、試掘調査で確認された窯跡灰原部の南側前方から始めた。造構の使われ方は、仮 5・6 号で焼成した器や瓦の不良品を廃棄する場所として機能していたと思われる。

調査の手始めに、重機による試掘溝を何本にも渡って入れた。その結果、主に 20m 四方に炭化層及び須恵器・瓦が出土した。そこで包含層の広がりを平面と垂直で構造的に捉えるため 5m 方眼で杭を打つ。次に土層の堆積状況の変化を観察する畦を 30cm 幅で残しながら掘り進めていく。そうすると耕土の 20cm 下から暗赤灰色層・灰白色層・褐色層が順次検出できた。仮 5・6 号南側前方直下では、耕土の下 40~50cm から遺物包含層が出土した。遺物の中には、前年度の試掘調査で報告された高台付短頭轍と同一の十器が含まれていた。よってこの層は、仮 5・6 号窯の灰原部の一体として理解でき、包含層の直下は岩盤となる。岩盤には人為的に工作して平坦にした加工痕が見られ、更には 1 柱 × 2 柱の建物の柱穴が 6 穴検出できた。(幅: 縦 5m・横 4m) 建物遺構からは、土器や瓦を作る際に用いられた叩き板と推測される調整工具が一点出土した。北側に A 地区の窯体群を控えていることから、当時はこの建物を工作所としながら土器や瓦の製作にあたっていたのであろうと考えられる。接したところには、粘土の留め場が幅 80cm 四方、深さ 50cm で確保されていた。

B 地区は丘陵支群の谷間に位置するため自然に流出した堆積物が多くを占める。したがって岩盤も長い年月とともに削られ、谷の周縁がわずかに残る程度となる。その一部を利用して工作所を設置したのであろう。岩盤以外の箇所を掘り下げていくと、深さ約 150cm 近りにはいく本にも渡って流木が散在し、その中には古代の工人達が窯焚きに利用した木も含まれているのであろう。木片の周辺には、小さな礫が深さ 5cm 前後で B 地区南西側に分布している。礫層を検出した時は、人為であるか自然なもののかを調べるためにあたり 1m 幅の試掘を行った。そこでは礫層の下の掘り込みの状況から、意図的に溝を掘り埋めたのではなく自然に蓄積した様子が伺える。このように、岩盤を基礎とする建物遺構と後世の耕作などで原型をとどめない灰原部が、B 地区での人間の生活跡といえよう。付け加えるならば、流木や礫群も間接的には生活の一部であり、両者の関わりが当時の歴史復元へと展開していくのである。

時期は、出土遺物の蓋のかえりの退化と坏の高台、あるいはヘラ削りの減少から判断するならば、8 世紀後半代といえよう。全体の遺物もほぼ同時期にあたり、操業は短期間でなされていたのであろう。

## 1) 須恵器

### ① 坯 (第1図1~5)

1は、高台付で接地面が平坦で、口縁端部はU状の形態である。2は、底部は平らで端部はU状を呈している。3は、高台が削り出しで接地面中央がやや凹んでいる。端部はやや尖る。4は、底部に糸切り痕があり、高台は接地面内側がわずかに浮く。体部から口縁にかけて厚みがなく端部は先鋒である。5は、高台が削り出しで接地面が外側に浮き、中央が凹んでいる。口縁端部は先鋒に形作られている。

### ② 塹 (第1図6~8)

6は、高台が貼り付けで接地面は平坦である。7は、接地面が外反し貼り付けで底部は厚く作られている。8は、高台が方形状を呈し、接地面は平らである。6,8の体部は緩やかに外反しながら立ちあがるが、7は直線的である。

### ③ 蓋 (第2図9~16)

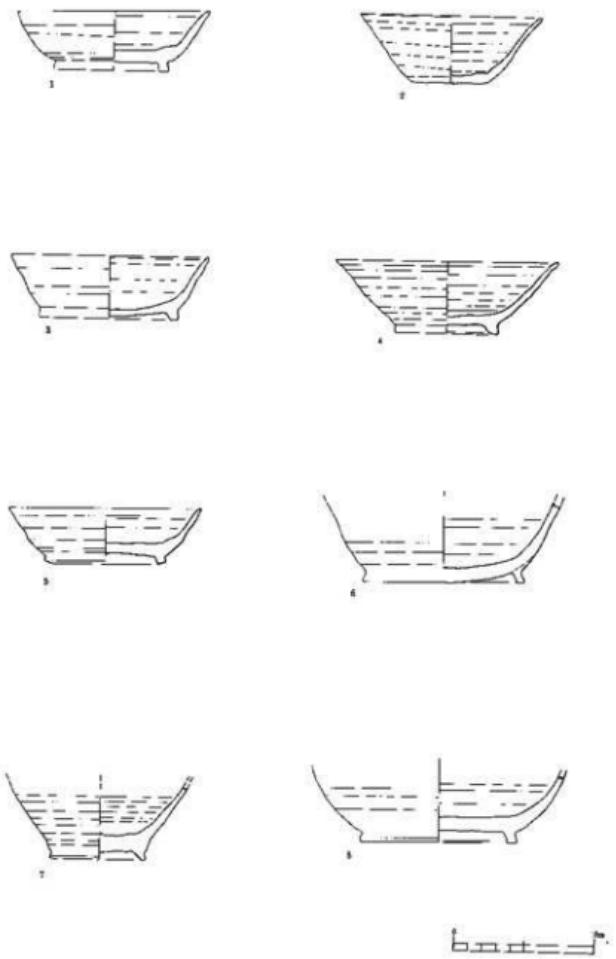
9は、つまみの中央がやや凸で天井部は偏平である。口縁は断面三角形を呈し、先端は外に向く。10は、つまみが平らで天井部は緩やかに内傾する。口縁部先端は内傾に向き方形状である。11は、中央が凸面状を呈するつまみで天井部は緩やかに反り気味に口縁部を形成している。口縁は方形で端部は平らである。12は、擬宝珠つまみで、天井部は張り気味に内反する。ヘラ削りが多く施されている。口縁部は断面三角形を呈し、先端は小さく尖る。13は、中央が凸面を成すつまみで天井部は内反し $1/2$ のところでやや外反する。口縁部は断面三角形でまっすぐ下を向く。14は、擬宝珠のつまみで大きな曲線を描きながら口縁部につながる。端部断面は先端が丸い三角形でやや内傾する。15は、つまみの頂部が平坦で天井部は上 $1/2$ がほぼ平らで下 $1/2$ は中央で段を有し、口縁に向かって内反する。端部は断面三角形でやや外傾する。16は、頂部中央が凸面のつまみで天井部は小さく曲線を描いて口縁にいたる。端部は断面三角形で垂直に下方する。天井部裏にヘラ記号がある。

### ④ 壺・壺・高壺・短頸壺 (第3・4図17~24)

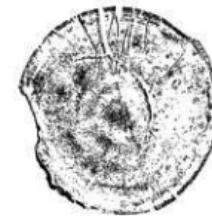
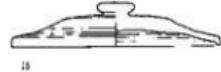
17, 22, 23の壺は、内面が青海波文状叩きの上から回転ナデを施し、外面では平行叩きまたは斜目横方向叩きで調整が行われている。

## 2) 瓦 (第4・5・6図1~12)

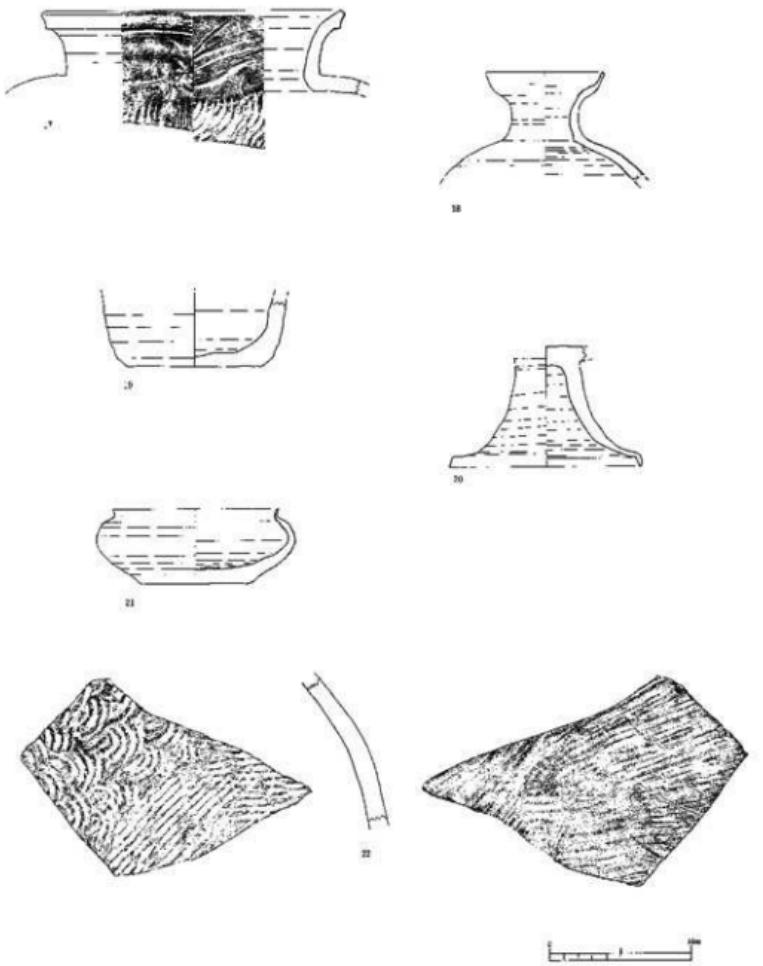
1, 2, 4~12は、平瓦で凸面が横方向の繩目叩きの上からナデる。凹面では布目痕の後にナデ調整を実施している。繩目痕はいずれも13条以下で粗繩目である。3は、丸瓦で凸面が縦方向の平行叩きの後にナデ調整をする。凹面では布目痕の上からナデている。



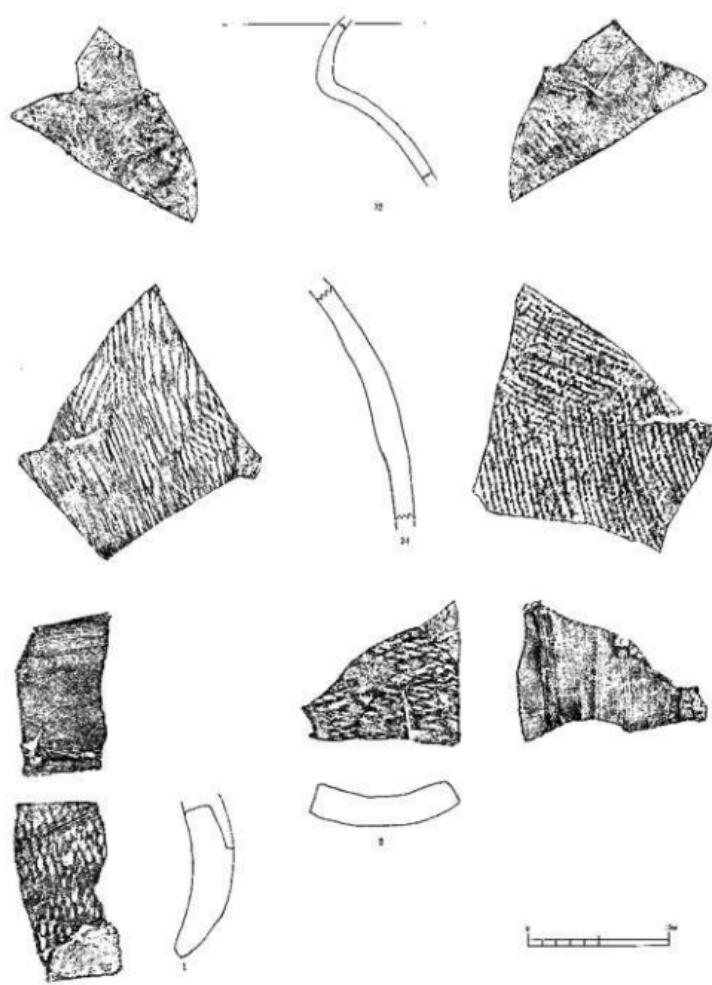
第3図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(1)



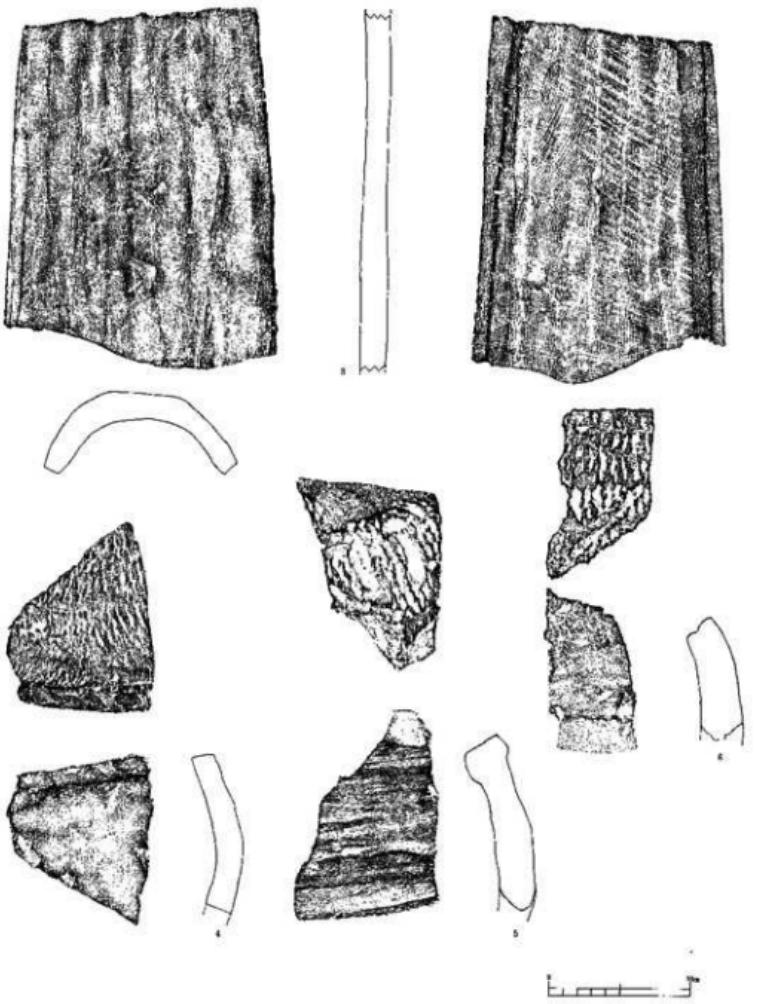
第4図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区（II）



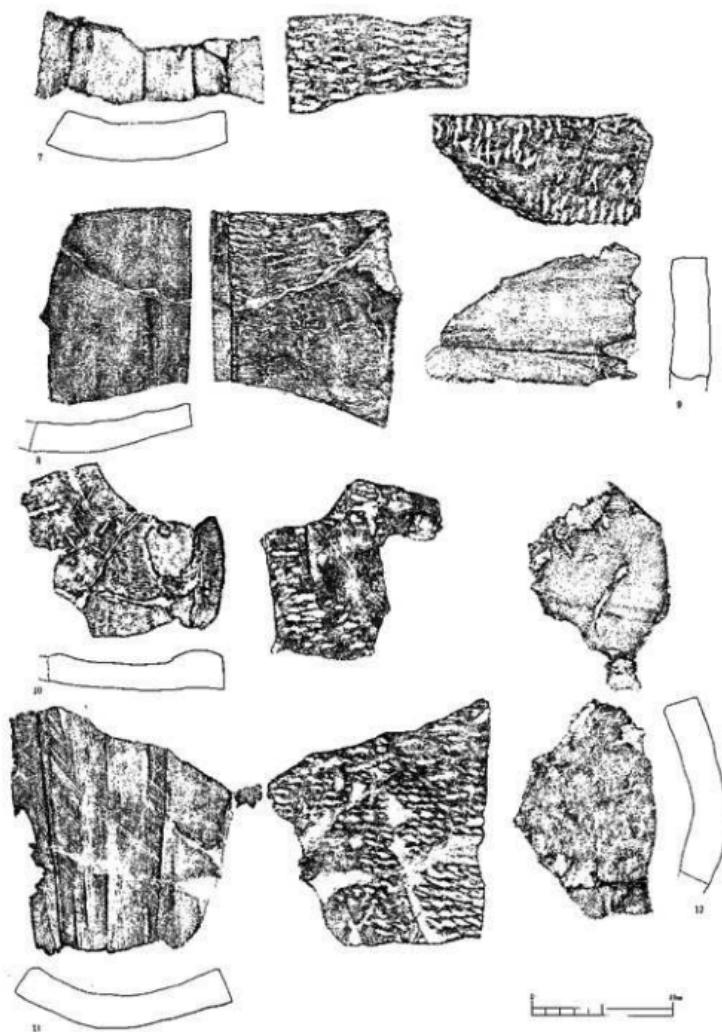
第5図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(Ⅲ)



第6図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(IV)



第7図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区(V)



第8図 下村窯跡出土遺物実測図・B地区（VI）

表 1-1 下村窯跡Ⅰ地区遺物觀察表

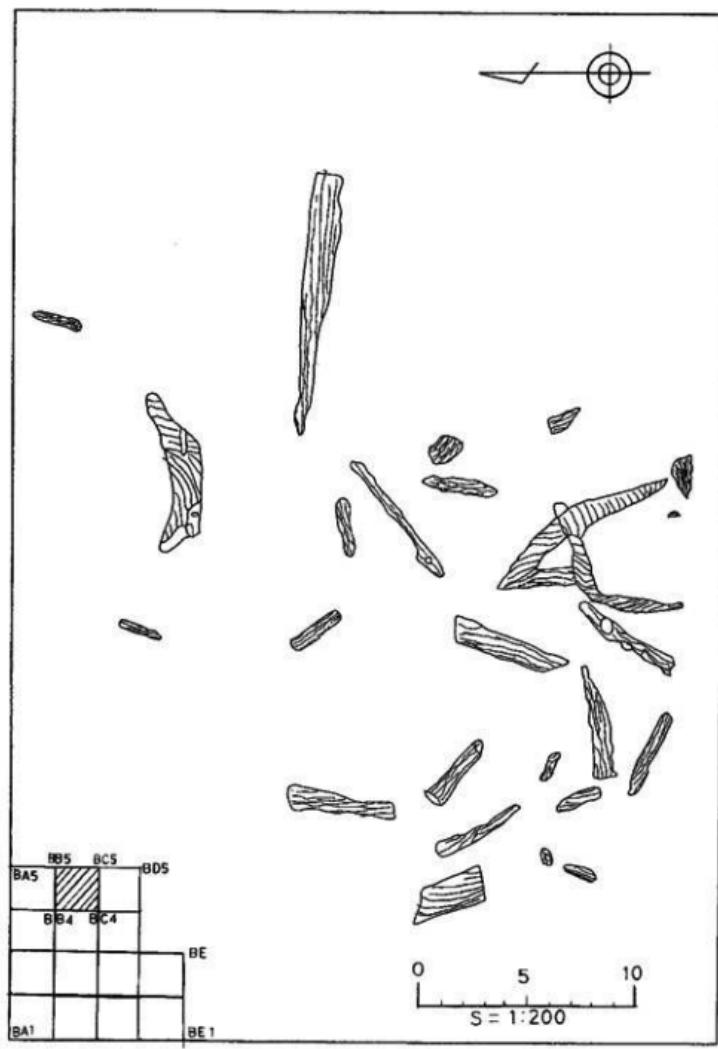
種類	番号	出土区	種別	器種	寸法	重量	内面	外面	背面	胎土	外侧面	内侧面	脚	被覆	被覆	被覆
							口径	底径	底高	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ
1	B - 2	須恵器	高台付环	13.7	4.2	8.0	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.5~1mmの砂粒が少量含まれる	灰(5Y54)	灰(5Y54)	灰(5Y54)	灰(5Y54)	灰(5Y54)	灰(5Y54)
2	H - 3	"	手	12.95	4.7	5.4	不定方付ナメ	不定方付ナメ	不定方付ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量含まれる	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)
3	B - 2	"	高台付环	14	4.5	9.9	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	砂粒がほとんどない	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)
4	C - 1	"	高台付环	16.75	6.1	7.26	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量	灰(5Y54)	灰(5Y54)	灰(5Y54)	灰(5Y54)	灰(5Y54)	灰(5Y54)
5	A - 3	"	高台付环	13.6	4.0	8.4	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	少量	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)	灰(7.5Y64)
6	A - 2	"	高台付輪			11.5	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)
7	A - 2	"	高台付輪			6.5	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	少量	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)
8	B - 2	土器質	輪			11.1	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量含まれる	灰(5YR54)	灰(5YR54)	灰(5YR54)	灰(5YR54)	灰(5YR54)	灰(5YR54)
9	B - 2	須恵器	蓋	15.5	2.16		回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.5~1mmの砂粒を少量含む	灰(Hv67.5Y64)	灰(Hv67.5Y64)	灰(Hv67.5Y64)	灰(Hv67.5Y64)	灰(Hv67.5Y64)	灰(Hv67.5Y64)
10	A - 2	"	蓋	13.8	3.4		回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量含まれる	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)
11	B - 2	"	蓋			3.15	不定方付ナメ	不定方付ナメ	不定方付ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量含まれる	灰(N5)	灰(N5)	灰(N5)	灰(N5)	灰(N5)	灰(N5)
12	C - 2 ベットa	"	蓋	13.7	2.66		回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~1mmの砂粒が少量含まれる	灰(7.5Y54)	灰(7.5Y54)	灰(7.5Y54)	灰(7.5Y54)	灰(7.5Y54)	灰(7.5Y54)
13	C - 2 ベットa	"	蓋	14.1			回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量含まれる	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)
14	A - 2	"	蓋				回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.5~1mmの砂粒が少量含まれる	灰(10YR54)	灰(10YR54)	灰(10YR54)	灰(10YR54)	灰(10YR54)	灰(10YR54)
15	B - 2	"	蓋	14.7	3.1		回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	砂粒がほとんど付かない	灰(5.5Y64)	灰(5.5Y64)	灰(5.5Y64)	灰(5.5Y64)	灰(5.5Y64)	灰(5.5Y64)
16	B - 2	"	蓋	13.65	4.0		回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)	灰(N6)

表 1-2 下村窑址 B 地区遗物堆积表

表1-(3) 下村窯跡B地区遺物調査表

遺物番号	出土区	種類	凸面調査 全数	凹面調査 全数	各目の 種類数	側面調査 全数	端面調査 全数	胎 土	焼成 度	内 色	外 面	備 考
1	B-1	平瓦 上から裏面のナメ	8本	布目調の上に横 万向の印記	10×8本			0.1~1mmの砂粒と黒石 が少々混入する	やや 軟	にぶい質感 (10YR 4d)	灰白(10YR 7d)	炭化付着 焼成時
2	B-1	"	横方向の端面印き	10本	布目調の上に横 万向の印記	8×10本		0.1~0.5mmの砂粒が少 量含まれる	良	灰白(10YR 7d)	灰白(10YR 7d)	
3	C-1	丸瓦 池、蛇形の端面印きの ナメ	7本	布目調の上に横 万向の印記	7×4本	凸面・凹面に 面取り		0.1~1mmの砂粒が少量 含まれる	良	灰白(10YR 7d)	灰白(10YR 7d)	
4	B-3	平瓦	横方向の端面印き	8本	布目調の上に横 万向の印記	7×5本	凸面に面取り	0.1~1mmの砂粒と黒石 が少々混入される	良	灰白(7.5YR 7d)	灰白(7.5YR 7d)	
5	B-2	"	端方向の端面印きの 上から裏面のナメ	7本	布目調の上に横 万向の印記	7本	凹面に面取り	0.1~1mmの砂粒と塊状 の陶器質が少々混入される	やや 軟	にぶい質感 (10YR 7d)	にぶい質感 (10YR 7d)	
6	B-1	"	横方向の端面印きの 上から裏面のナメ	8本	布目調		凹面に面取り	0.1~1mmの砂粒が少 量含まれる	良	灰白 (7.5YR 6d)	灰白 (7.5YR 6d)	
7	A-2	"	横方向の端面印きの 上から裏面のナメ	7本	横方向に横 印記			0.1~1mmの砂粒が少 量含まれる	良	明礬灰 (6YR 7d)	褐灰 (10YR 7d)	
8	C-3	"	横方向の端面印き	9本	布目調の上に斜 め方向のナメ	7×5本	凸面に面取り	0.1~1mmの砂粒と黒石 が少々混入される	良	灰白(10YR 7d)	褐灰 (10YR 6d)	炭化付着 焼成時
9	B-2	"	横方向の端面印きの 上から裏面のナメ	8本	布目調の上に斜 め方向のナメ	9×10本	凹面に面取り					
10	C-1	"	横方向の端面印きの 上から裏面のナメ	7本	布目調の上に斜 め方向の印記	9×6本	凹面に面取り	0.1~1mmの砂粒と黒石 が少々混入される	やや 軟	にぶい質感 (10YR 7d)	にぶい質感 (10YR 7d)	
11	B-2	"	横方向の端面印き	10本	布目調の上に横 万向の印記	9×9本	凹面に面取り	0.1~1mmの砂粒と塊状 の陶器質が少々混入される	良	灰白 (7.5YR 6d)	褐灰 (7.5YR 6d)	
12	B-2	"	横方向の端面印き	9本	純方向のナメ			0.1~0.5mmの黒石が少 量含まれる	やや 軟	にぶい質感 (10YR 7d)	にぶい質感 (10YR 7d)	

\* 5 cmあたりの網目の条数  
 {13条以下粗縫目  
 {14条以上精縫目}



第9図 B地区木片出土実測図

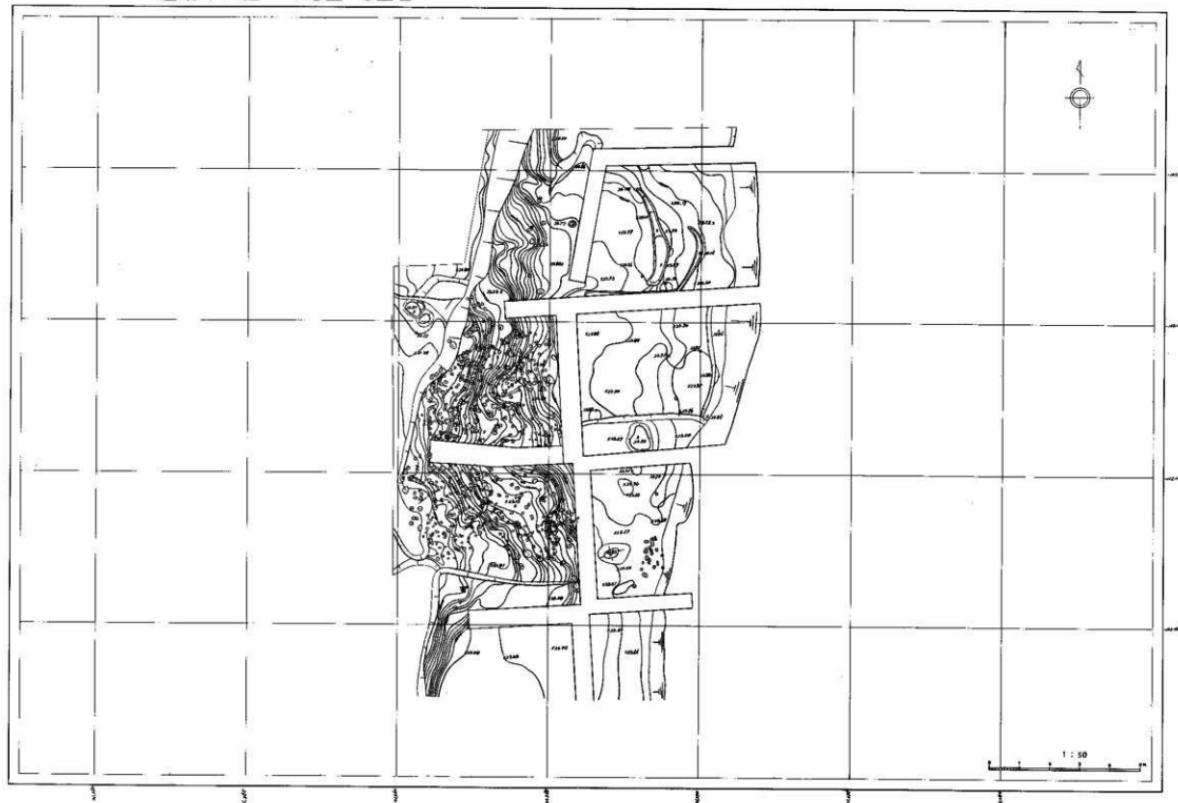
## (2) C地区

最初に調査へ着手したのは、丘陵南側先端部からである。ここは磁気探査のデータによると、反応した基数が最も多く9基にものぼる。仮24号窯は、調査前から農道に窯壁部分が露頭していた。調査の方針は前年度の試掘調査と窯壁面観察から検討した。從来窯の構築方法は、地面をくり抜く地下式、地面を掘り下げ天井を架構する半地下式、天井側壁を地表上に架構する地上式に分けられる。また窯の形としては登窯と平窯が伝えられている。窯の変遷は5世紀から始まり、7世紀中頃までは登窯が主流であった。後半になると平窯が出現する。9世紀になると、焼成部に分焰柱や側面に焚き口を設ける“ヨコクベ”的出現など大きく変化する。その中で仮24号は半地下式に属する構築を行い、形は平窯と考えられる。このことから、地面を掘り抜いている面の検出作業に入った。耕土から平均して約30cm下から灰白色3cmの塊状の粘土を伴う面が最初の地山面である。表面上では窯体らしきところはほとんど把握できず、磁気探査のデータに頼った。仮15・17・20・21号に窯体土層堆積状況観察用畦を設定した。それは、窯の長軸と焼成部、燃焼部、窯口部と推定される各短軸部分にである。

仮15・17・21号を完掘して明らかになったのは、岩盤を掘り込み溝を造った跡に土が堆積したことである。20号については、床面から須恵器片が數点出土しただけで、この窯を使用した炭化物などの痕跡はなかった。よって当時の工人は、窯を地面までは掘り抜いたが、その後の天井部を架構せず放棄したのであろう。形は平窯に属する。仮24号では、天井部を検出したが半分は崩れていた。中に入っている堆積土からは、遺物が確認できなかった。操業回数は、床面に2枚炭化層が乗っていることから数回焼かれたのではないか。窯体の形は平窯で、焼成部の一部が残存し他は失われている。仮16・22・23号は同じく溝遺構と思われる。またこの一帯の窯体をめぐる溝も出土した。

仮12号窯は丘陵と丘陵の谷間に位置する。調査は5m間隔の方眼を組み、30cm幅の畦を残しながら掘り進めた。耕土40cm下から焼土と炭化層が10m四方に渡って検出された。周囲には溝・柱穴・粘土置場の遺構が確認できた。焼土の下は窯体天井部にあたったが、ほぼ崩壊の状態であった。堆積土中から須恵器や瓦片が出土した。炭化層は3層に分けられ、多量の遺物が含まれていた。遺物の種類は須恵器と瓦で、器種は壺・高台付碗・壺・甕・平瓦・丸瓦、その他に宮崎県内で初めて出土した硯も1点ある。時期は、遺物形成から8世紀代から9世紀初めにあたる。また遺物出土状況から、この区域は灰原部と思われる。しかしながら、各種の品がそれぞれどの窯体の品であるか、丘陵上の窯か、あるいは仮12号窯のものは、整理作業において詳細に検討せねばなるまい。

遺構平面図 C地区 3回目



第10図 仮12号墳灰原部出土状況図（空中測量）

### 1) 須恵器

#### ① 瓢（第10図1）

脚が前方に2足あるが、後方の2足は焼成中に欠失し、海面にはヘラによって記号が残されている。形は傾斜を特徴とする手捏ねの風字硯である。

#### ② 壺（第11図2～12）

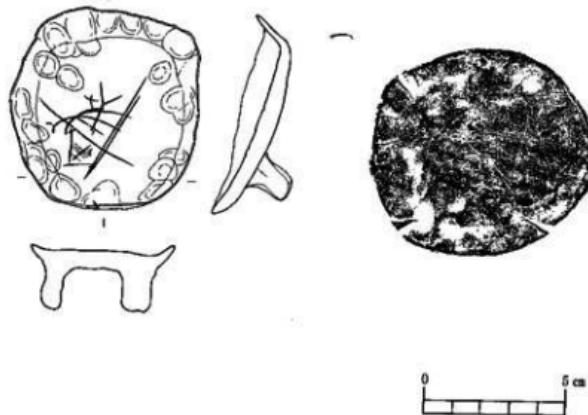
口縁部でそり気味に外反する。その他は直線状に立ち上がる。底部は平坦で厚みが1cm前後である。口径は最小10cm～最大14cmで、器高は2cm～5cm、底径3cm～6cmである。

#### ③ 高台付壺（第11図9～17・19・20）・壺（第12図18・21・22・24・25）・壺（第13図23・26・27）

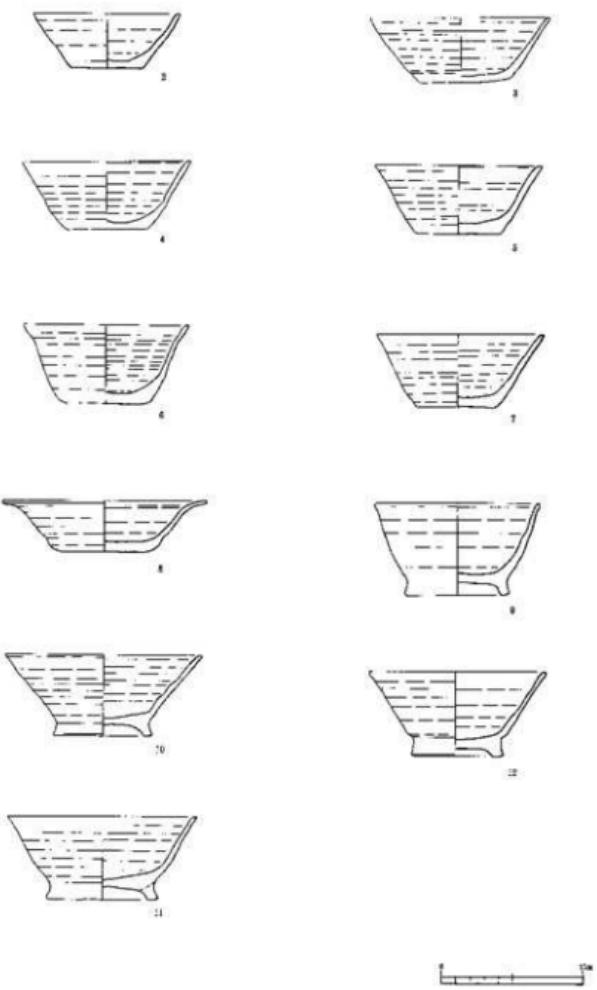
壺については、高台の接地面が、9・13・15・20は外反する。10～12・14・16は平坦で、17・19は内反する。16・17・20の口縁は、厚みを帯び外反する。他はU状を呈し尖る。壺は、18・21の口縁は短く立ち上がるが、他はゆるやかに外反する。壺については、口縁端部で27は断面方形を呈し、23は真直ぐに立ち上がり断面菱形である。26は、短く外反し端部は尖る。

### 2) 瓦（第14図1～3・第15図4～6・第16図7～10・第17図11～13）

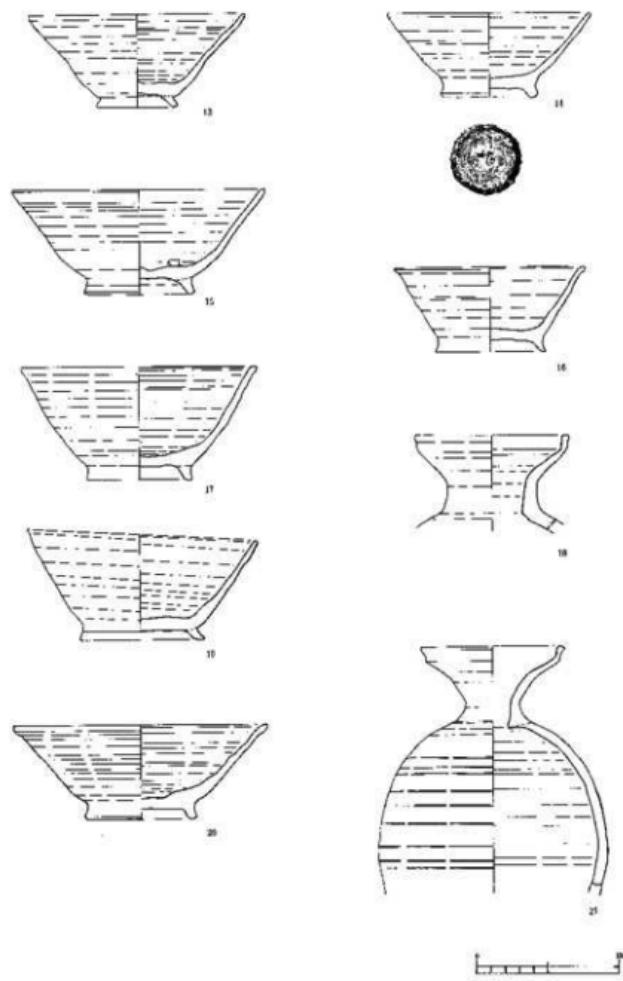
綱目叩きは、横方向・縦方向・斜め方向または凸面・凹面に分けられる。5cmあたりの綱目の条数を13条以下粗綱目、14条以上精細目と設定するならば、全て粗綱目瓦といえる。



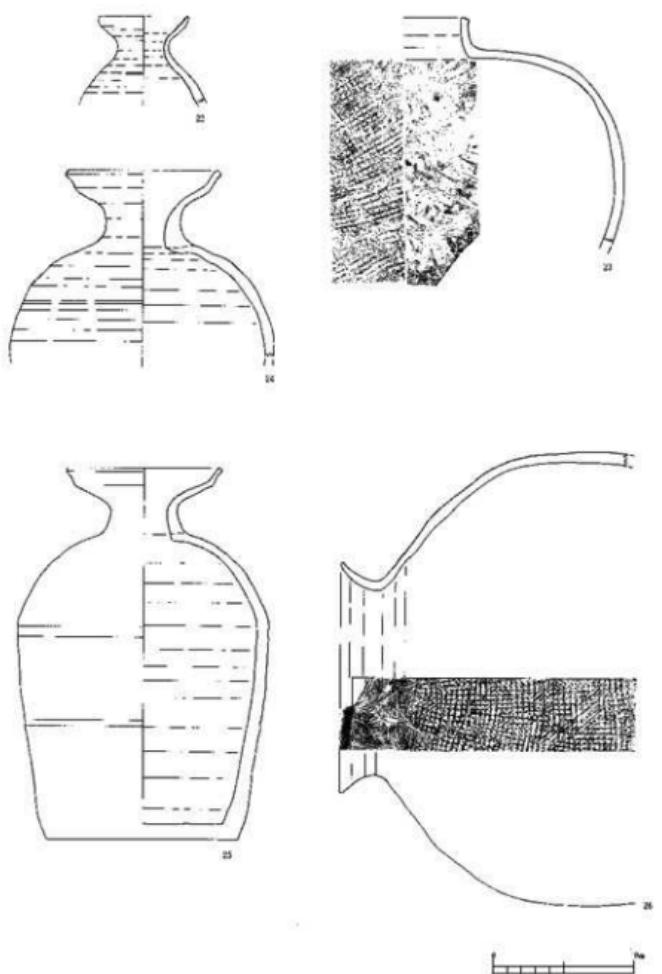
第11図 下村窯跡出土遺物実測図・板12号窯（1）



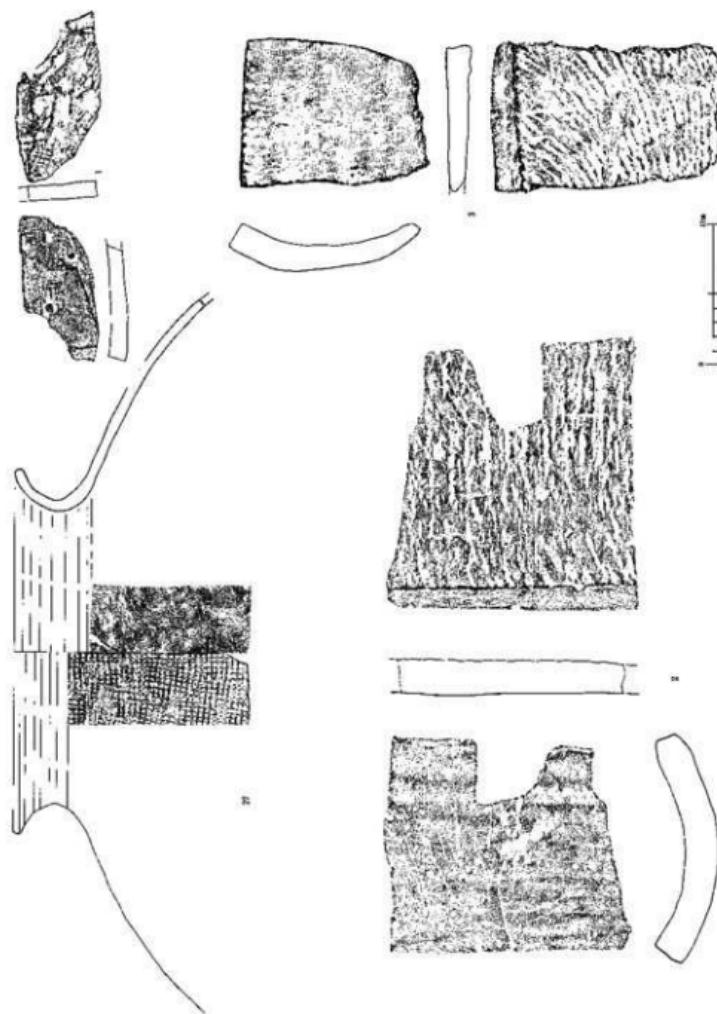
第12図 下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯（II）



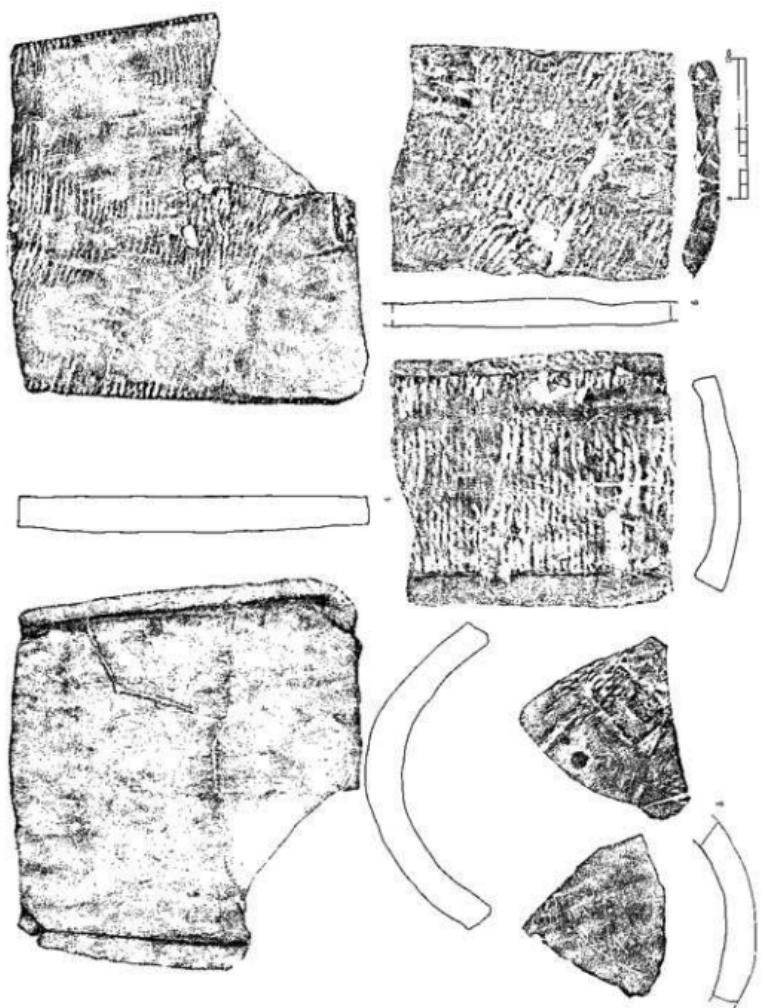
第13図 下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯（Ⅲ）



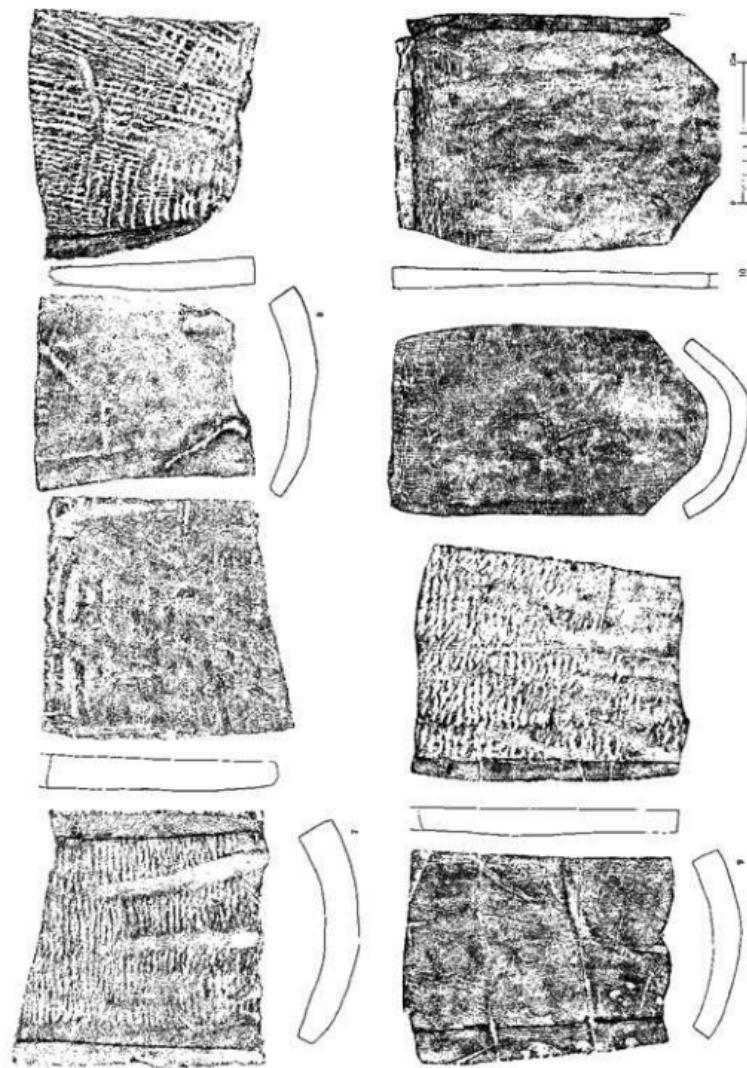
第14図 下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯(IV)



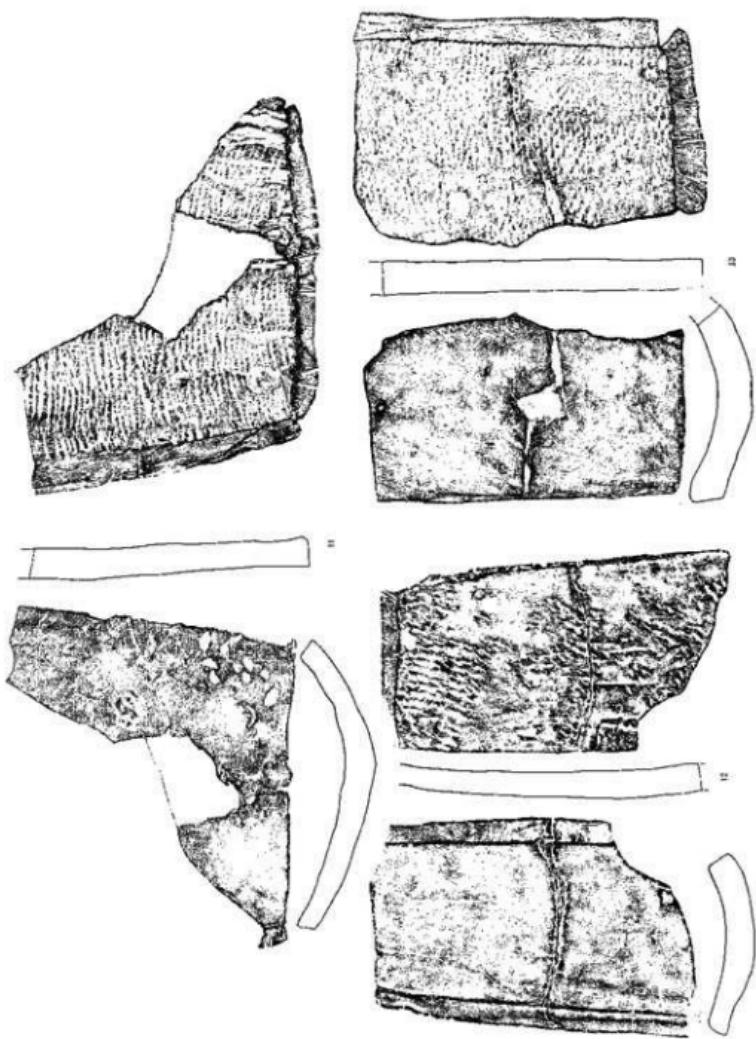
第15図 下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯（V）



第16図 下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯（VI）



第17図 下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯 (VII)



第18図 下村窯跡出土遺物実測図・仮12号窯（Ⅷ）

表2-(1) 下村黒跡板12号墓遺物観察表

遺物番号	種類	器種	口径	底径	高さ	内面	外面	壁面	胎土	外色	内色	背面	焼成	備考
1 1-6	瓶	須恵器	2.15	3.9	3.9	不定形ナメ	不定形ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(5Y4)	褐灰(2.5Y5)	灰	海面に記号		
2 1-3	杯	須恵器	10.4	3.85	4.9	円筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(N6)	灰(N6)	灰			
3 1-4	杯	須恵器	12.75	4.6	6.2	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	褐灰(2.5Y5)	褐灰(2.5Y5)	灰	底部へチリ付着 武部、須恵器付着		
4 1-4	杯	須恵器	12	4.8	5.6	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(5Y6)	灰(5Y6)	灰	底部へチリ付着		
5 1-4	坪	須恵器	11.8	4.8	6.0	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-1.0mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(N6)	灰(5Y6)	灰	底外、重ね焼きの 付着物		
6 1-3	瓶	須恵器	11.65	5.6	5.8	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(7.5Y5)	灰(7.5Y5)	灰			
7 1-3	坪	須恵器	11.85	5.2	5.6	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(5Y6)	灰(5Y6)	灰	底部へチリ付着		
8 K-5	坪	須恵器	14.5	3.6	6.0	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	褐灰(10YR5)	褐灰(10YR5)	灰	底部へチリ付着		
9 1-3	高台付壺	須恵器	11.5	6.5	7.1	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-1.0mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(5Y6)	灰(5Y6)	灰			
10 1-4	高台付壺	須恵器	13.9	5.8	6.5	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-1.0mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(7.5Y5)	灰(7.5Y5)	灰			
11 1-4	高台付壺	須恵器	13.4	5.9	7.4	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-1.0mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(N6)	灰(N6)	灰	高台は貼り付け		
12 1-3	高台付壺	須恵器	12.5	6.0	6.2	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(5Y5)	灰(5Y5)	灰	高台は貼り出し		
13 1-3	高台付壺	須恵器	15.4	6.6	5.2	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-0.5mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(7.5Y5)	灰(7.5Y5)	灰	高台は貼り付け		
14 H-3	高台付壺	須恵器	14.4	6.0	6.5	圓筒ナメ	圓筒ナメ	0.1-1.0mmの砂粒が 少量に含まれる	灰(7.5Y5)	灰(7.5Y5)	灰	底部外側、ヘタれ		

表 2-(2) 下村竪築版12号窓遺物調査表

遺物番号	出土区	種別	器種	口径	底径	高さ	底層	調査量 cm			土	外	内	面	面	面	面	面	施底	備考	
								外	内	面											
15	1-3	須恵器	高台付壺	27.85	7.45	7.4	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.5~1.0mmの砂粒が少量に含まれる	灰(N)	灰(7.5Y 6)	灰(7.5Y 6)	灰(7.5Y 6)	灰(5Y 6)	灰(5Y 6)	灰(5Y 6)	灰(5Y 6)	灰(5Y 6)	灰(5Y 6)	底内面、高台側ねじ付き器物
16	1-2	須恵器	高台付壺	13.4	6.0	7.7	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量に含まれる	灰(5Y 6)	底内面、高ねじ付き器物									
17	1-3	須恵器	高台付壺	16.65	8.0	7.3	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~1.0mmの砂粒が多量に含まれる	灰(N)	底外側底									
18	1-3	須恵器	壺	11.0			回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.5~1.0mmの砂粒が少量に含まれる	灰(7.5Y 6)	底									
19	1-3	須恵器	高台付壺	16.4	7.6		回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量に含まれる	灰(2.5Y 5)	底									
20	1-3	須恵器	高台付壺	18	6.7	7.55	回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量に含まれる	灰(7.5Y 6)	底									
21	1-4	須恵器	壺	11.5			回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~1.0mmの砂粒が多量に含まれる	灰(5Y 6)	底									
22	H-4	須恵器	壺	6.4			回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.5~1.0mmの砂粒が少量に含まれる	灰(7.5Y 6)	灰(N)	底								
23	1-4	須恵器	壺				回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~0.5mmの砂粒が少量に含まれる	灰(5Y 6)	底									
24	1-4	須恵器	壺	11.0			回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~1.0mmの砂粒が少量に含まれる	灰(9.5Y 5)	灰(7.5Y 6)	内、外側に自然軸								
25	1-4	須恵器	壺	11.0			回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~1.0mmの砂粒が多量に含まれる	灰(7.5Y 6)	肩から口縁にかけた自然軸									
26	1	須恵器	壺	16.3			回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~1.0mmの砂粒が石けん少量に含まれる	灰(7.5Y 6)	外、頭部、自然軸									
27	1-3	須恵器	壺	25.5			回転ナメ	回転ナメ	回転ナメ	0.1~1.0mmの砂粒が少量に含まれる	褐色(7.5Y 6)	底									

表2-(3) 下村窯跡版12号窯遺物観察表

遺物番号	出土区	種類	凸面調査	凹面調査	布目窯	凹面調査	側面調整	端面調整	胎	土	焼成	凸面	凹面	色	備考
1 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	10本	布目窯の上から ナデ		凹面の面取り 側面の面取りナデ	ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が少量化	墨	灰(5Y 5)	灰オリーブ (5Y 6)	格子目 15本		
2 1-4	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	9本	布目窯の上から ナデ		ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が少量化	墨	灰(5Y 5)	淡黄緑 (10YR 9)	淡黄緑 (10YR 9)			
3 1 3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	9本	布目窯の上から ナデ		ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が少量化	墨	灰(5Y 5)	灰白 (10YR 9)	灰白 (2.5YR 7)			
4 1-3	丸瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	11本	布目窯の上から ナデ		凹面に面取り		墨	灰(5Y 5)	にぶい黄褐 (10YR 7)	にぶい黄褐 (10YR 7)			
5 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	12本	布目窯の上から ナデ	10×10本	斜方の上から	ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が多量に含まれる	墨	淡黄緑 (10YR 8)	淡黄緑 (10YR 8)			
6 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	7本	布目窯の上から ナデ	6×7本	斜方の上から	ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が多量に含まれる	墨	淡黄緑 (10YR 8)	淡黄緑 (10YR 8)			
7 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	11本	布目窯の上から ナデ	6×6本	斜面の面取り	ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が多量に含まれる	墨	淡黄緑 (10YR 8)	淡黄緑 (10YR 8)			
8 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	8本	布目窯の上から ナデ	7×7本		ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が多量に含まれる	墨	明褐色 (7.5YR 7)	明褐色 (7.5YR 7)			
9 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	9本	布目窯の上から ナデ	8×8本	斜方の上から	ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が少量化	墨	灰白 (10YR 9)	灰白 (10YR 9)			
10 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	12本	布目窯の上から ナデ	4×6本	凹面に面取り		0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が少量化	墨	灰(5Y 5)	灰(5Y 5)			
11 1-4	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	10本	布目窯の上から ナデ	6×7本	凹面の面取り 側面調整ナデ	ヘラ切り後	0.5~1.0mmの砂粒と黒 石が多量に含まれる	墨	灰(5Y 5)	灰(5Y 5)			
12 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	9本	布目窯の上から ナデ	7×7本	凹面の面取り 側面調整ナデ	ヘラ切り後	0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が多量に含まれる	墨	淡黄 (10YR 8)	淡黄 (10YR 8)			
13 1-3	平瓦	輪打の輪目と出子 ともナデ	出子の上から 出子の上から	12本	布目窯の上から ナデ	7×5本	凹面に面取り		0.1~1.0mmの砂粒と黒 石が少量化	墨	明褐色 (7.5YR 7)	明褐色 (7.5YR 7)			

### 第三章 まとめ

調査前、宮崎県及び鹿児島県にまたがる地域では、窯跡が北部九州に比べて遙かに少なかつた。北部の窯跡が太宰府を始め鴻臚館など古代から現代まで九州の文化の中心であったことを差し引いても南部との差がありすぎるのではないか。そこで歴史を通してその問題を検証してみる。中央支配においては各地域を要める機構が存在した。国府は、現在の県庁にあたる役割を担って律令制の時代に登場した。また国府に伴う施設として郡衙・国分寺・国分尼寺が建てられていった。これらの建物の屋根には瓦が葺かれて、日常生活用品には道元焰による窯で製作された須恵器の蓋杯・壺・甕あるいは覗などが用いられたのであろう。ではどのようにして各種の品々を販売したのか。考えられるのは、平城京建設時の瓦や口常用具としての器類を供給する中央工人の製作品の各国府関係機関への搬出、中央から工人を派遣し地方工人の養成に当たりながらの生産活動の2点である。可能性は後者が高い。今回の調査でも、出土遺物の中に畿内や九州北部では見られない窯や調整法を確認できるとともに、蓋杯など口常よく使用される品は畿内の形と類似していた。よって中央の指導を受けながら、地域に根づく過程において製作に特徴が生じてきたと推測される。

のことから、宮崎・鹿児島両県にもっと多くの窯が発見されてもいいはずである。しかし、歴史上の流れではそうであっても、供給する側の製作環境も考慮してみる必要がある。両県特に鹿児島には桜島から噴出する火山灰が毎年のように降り、シラス台地という基盤の軟弱な層を形成し、当地の人々はその上で暮らしている。宮崎県も岩盤の上をかなりの火山灰が覆っている。窯の構築は、地下を掘り抜く手法が主流で地面が強固な所ほど適している。従ってこの点が窯の構築に向かず窯跡群として展開しなかった最大の理由と、下村窯跡調査以前は定説になっていた。

平成3年7月から始まった窯跡調査で、現時点までに何点かが明らかになった。窯体の構築と使用がなされているのは仮24号と仮12号で、木使用なのは仮20号である。各窯体は半地下式で地山面を掘り下げている。仮20・24号は岩盤を抜いている。仮12号は粘土層を利用して窯体を造っている。位置も谷間や丘陵先端部など低い箇所で、風通しも大してよくない。それぞれの窯体は小型の平窯で、操業回数も少なく、短期間用いていたのであろう。出土品も、瓦の内面の縦目叩き、または須恵器の壺・甕など器種や製作の特徴が伺える。これは、当時の工人達が製作の品によって窯を使い分けたか、あるいは工人間での分業化によるものであろう。更には、調査を進めていくと、例えば丘陵の上や下の箇所といったように場所による使い分けも考えられよう。このように今回の調査では、地域的な特性だけでなく、社会組織の復元及び解明の糸口や材料の提供を得るなど、大いなる成果をあげつつある。

下村窯跡調査概要報告書

平成4年3月

編集・発行

佐土原町教育委員会

宮崎県佐土原町大字下田島 20,660

印 刷  
㈲ 池 田 印 刷